大分県文化財調査報告書　第 152 輯

—街路鶴崎駅前松岡線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

上松岡遺跡

２００３年３月

大分県教育委員会

上松岡遺跡

序　　文

本書は、県教育委員会が大分土木事務所の依頼を受けて実施した、街路鶴崎駅前松岡線道路改良事業に伴う、上松岡遺跡の発掘調査報告書です。

大分市は古くより豊後国の中心地として栄え、大友氏館跡・亀塚古墳・豊後国分寺跡などの国指定史跡をはじめとした多くの文化財があります。

今回調査した上松岡遺跡は、大分市東部を流れる大野川流域にあり、河口から10キロメートル程上流の沖積平野に位置しています。発掘調査の結果、弥生時代の竪穴住居・土坑や中世の掘立柱建物跡等が検出でき、弥生時代から中世にわたる人々の長い営みの跡を明らかにすることができました。

本書が埋蔵文化財の保護に向けて、また、地域の先人の生活を理解する資料として、さらには学術研究の一助として活用されれば幸です。

終わりに、長期間にわたる発掘調査に御支援、御協力をいただきました関係各位に、衷心から感謝申し上げます。

平成 15 年 3 月 31 日

大分県教育委員会教育長

石　川　公　一

例　　言

1、本書は平成12年に実施した街路鶴崎駅前松岡線道路改良工事に伴う上松岡遺跡の報告書である。
2、調査は、大分県教育委員会が大分県大分土木事務所の委託を受け実施した。
3、遺跡・遺構の実測と撮影は調査担当者の甲斐寿義・細川　愛・東保春奈が行った。遺物の実測及びトレースは甲斐･細川が主に行った。
4、遺構写真は甲斐・細川によるが、空中写真は株式会社スカイサーベイに委託した。
5、遺物写真は甲斐・友岡信彦による。
6、書で用いた方位はすべて真北である。
7、本遺跡の出土遺物並びに図面・写真等は,大分県教育庁文化課文化財資料室に保管している。
8、本書の執筆・編集は甲斐寿義が行った。

目　　次

第1章 はじめに
　1 調査に至る経緯 …… 1
　2 調査団の構成 …… 1
第2章 遺跡の立地と環境 …… 2
第3章 発掘調査の成果 …… 5
　1 調査の経緯 …… 5
　2 調査の概要 …… 5
　3 基本土層 …… 7
　4 遺構と遺物 …… 8
　　(1) 旧石器時代の遺物 …… 8
　　(2) 弥生時代 …… 8
　　① 住居址 …… 8
　　② 土坑 …… 8～9
　　③ その他の土器 …… 10
　　(3) 中世の遺構と遺物 …… 10～12
　　①掘立柱建物跡 …… 10～12
　　② 中世の遺物 …… 12
第4章 まとめ …… 13

挿図目次

第1図　遺跡の位置 …… 1
第2図　上松岡遺跡と周辺の遺跡 …… 4
第3図　上松岡遺跡周辺地形図 …… 5
第4図　上松岡遺跡遺構配置図 …… 6
第5図　上松岡遺跡基本土挿図 …… 7
第6図　旧石器時代の遺物 …… 8
第7図　SH1実測図 …… 8
第8図　SK1実測図 …… 8
第9図　SK1出土遺物実測図 …… 9
第10図　SK2実測図 …… 9
第11図　SK2出土遺物実測図 …… 9
第12図　その他の遺物 …… 10
第13図　SB1実測図 …… 10
第14図　SB2実測図 …… 11
第15図　SB3実測図 …… 11
第16図　SB4実測図 …… 12
第17図　その他の遺物 …… 13

写真図版

第1図　上松岡遺跡遠景（南から） …… 1
第2図　上松岡遺跡全景 …… 1
第3図　北側土坑群（SB3） …… 2
第4図　南側土坑群（SB2･SB4） …… 2
第5図　SK1遺物出土状況 …… 3
第6図　SK1完掘状況 …… 3
第7図　基本土層（C－1区西壁） …… 3
第8図　SK2遺物出土状況 …… 4
第9図　SK2完掘状況 …… 4
第10図　SK2出土遺物（下城甕） …… 4

第１章　はじめに

１，調査に至る経緯

本遺跡は大分市大字毛井に所在する。

遺跡の所在する大分市毛井地区は、大野川の左岸にあたり周囲を広大な水田と緑あふれる山地に囲まれたのどかな田園地帯である。しかし、平成９年より大分市松岡でサッカー場を中心とした大分県スポーツ公園の建設が始まると、それに伴い道路交通網の整備、周辺丘陵の大型住宅地開発などの大型開発が進み、毛井地区もその姿が大きく変化し始めた。

本遺跡調査の原因となった街路鶴崎駅前松岡線道路改良工事は、その道路交通網整備の一環であり、県スポーツ公園へのアクセス道路として建設が進む国道197号大分南バイパスと直結させ、本線からスポーツ公園へのアクセスを可能にするために計画された。それに伴い平成12年度初めに県土木建築部より他の事業と共に分布調査の依頼が県教育委員会文化課にあった。これを受けた県文化課は路線内の分布調査を行い、遺跡存在の可能性が高い地区の回答を行ったが、本工区もその中の一つである。用地買収など条件が整った平成13年度初めに事業担当部局である大分土木事務所は試掘調査の依頼を県文化課に行い、県文化が試掘調査を行った。その結果、柱穴や土坑などを確認したため本調査が必要との所見を得た。本遺跡は、本来ならば周知の上松岡遺跡には含まれていないが、本遺跡が上松岡遺跡に隣接していること、試掘調査の結果、周知の上松岡遺跡と同時期の弥生時代の遺構を確認したことなどから上松岡遺跡の一部として取り扱うこととなった。

上松岡遺跡の本格的調査は平成13（2001）年７月11日 に開始し ８月11日 に終了した。弥生時代の袋状土坑、円形のピット群、中世頃と思われる掘立柱建物跡などを検出し、毛井地区の歴史を解明する上で重要な資料を得ることとなった。

２，調査団の構成

上松岡遺跡調査団の構成は、以下のとおりである。

調査主体	大分県教育委員会		
調査総括	石川 公一	大分県教育委員会教育長	
	工藤 正徳	大分県教育庁文化課長	
	麻生 祐治	同	参事兼課長補佐
	清水 宗昭	同	参事兼課長補佐
	高橋 信武	同	主幹
調査担当	甲斐 寿義（大分県教育庁文化主査）		
調 査 員	細川　愛	（　同　嘱託）	
	東保 春奈	（　同　嘱託）	
調査事務	西　哲弘	（　同　主幹）	
	西森 公誠	（　同　主任）	

第２章　遺跡の立地と環境

１，地理的環境

大分平野は九州の北東部に位置し、北に瀬戸内海西端の別府湾、東に佐賀関半島及び豊後水道、南に祖母傾山系，西には久住連山が展開している。平野の三方は九六位山、霊山、障子岳、高崎山、雨乞岳などの400ｍ～800ｍ級の山々が取り囲み、平野の中央部には大分県を代表する河川である大分川と大野川が北方の別府湾に流れ込んでいる。気象的には瀬戸内型が南海型や九州山地型に移行する遷移域にあたるとされている。

上松岡遺跡はこの大分平野の東部、大分市大字毛井に所在する。毛井地区は東方を丹生台地、西方を鶴崎台地に挟まれた大野川下流の沖積低地、乙津川との分岐点よりやや西に位置している。この下流域一帯は氾濫原が広範囲に形成されており、古来より洪水が発生しやすい地域であるが、本遺跡はこの毛井地区の南西端、標高は約11ｍ前後の、地形的には大野川左岸、標高約165ｍの古城山を基部として南から北へ延び別府湾を望む洪積台地の東端で、開析谷の出口に小扇状地として形成された、いわゆる松岡面に位置している。

第１図　遺跡の位置（国土地理院50,000分の1「大分」）

2，歴史的環境

鶴崎台地やその対岸の丹生台地上には、旧石器時代から近世にいたるまでの遺跡が数多く存在することが知られている。それに比べ大野川が形成する沖積平野では、毛井遺跡のように微高地には遺跡が存在するものの台地上に比べ遺跡数が極端に激減する。これはこの地域における大野川の氾濫のすごさを物語るとともに、人々がその氾濫を避けるため安定した台地上に生活の場を求めたからであろう。ちなみに、慶長６年から慶応３年の267年間に40回、明治～大正４年の48年間に18回という洪水の記録が残っている（註１）。

旧石器時代の遺跡は段丘上に集中している。近年、大分県スポーツ公園建設に伴う緊急発掘調査で西日本でも有数の原石産地遺跡である一方平Ⅰ遺跡が発掘されたことにより大規模な旧石器時代の遺跡の存在が明らかになった。同じスポーツ公園内の一方平Ⅱ・Ⅲ遺跡、牧ノ内遺跡、九池遺跡、上牧ノ内Ⅱ遺跡では少数の石器や剥片類が出土し、明野遺跡、尾崎遺跡でも流紋岩の剥片が出土している。

縄文時代の遺跡としては、段丘下の小池原貝塚や、横尾貝塚などが知られている。ここでは前期から後期に渡っての土器が検出され、遺構も埋葬･土坑･住居跡などが明らかになった。特に平成13年度の大分市の調査では、横尾貝塚周辺で縄文時代前期にさかのぼる可能性がある水場遺構が確認された。丘陵上では、一方平Ⅱ遺跡で無文･押型文土器、平栫･塞ノ神式土器を主体とした集石炉を伴う遺跡が発見され、また一方平Ⅳ遺跡では中期の船元式や後期の西平式土器などが出土している。上松岡遺跡の北約1Km にある久保田遺跡では晩期の遺物が出土している（註２）。

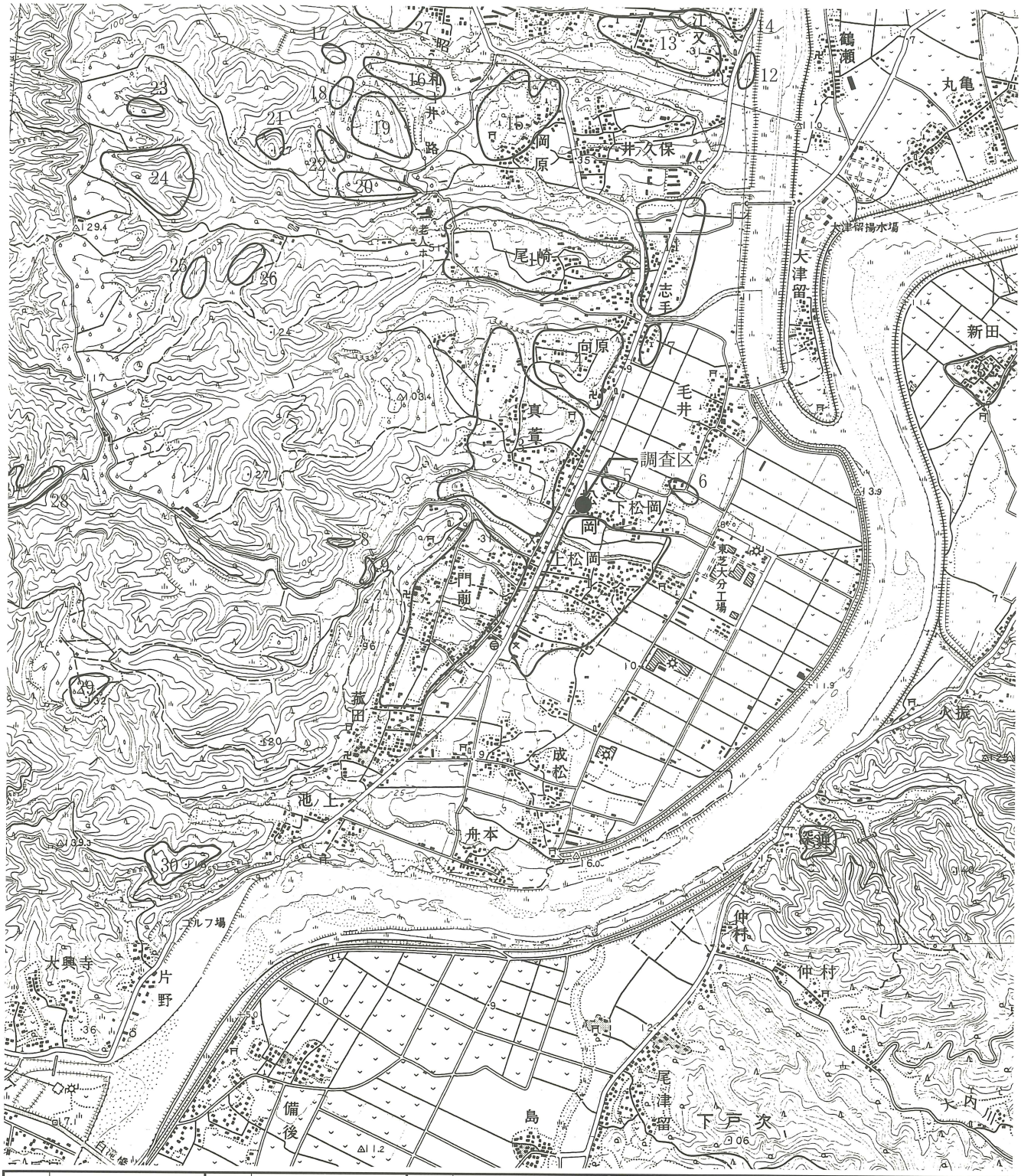
弥生時代になると遺跡数も増加する。早期から前期の段階としては、刻目突帯文土器を中心とする一方平Ⅳ遺跡や尾崎遺跡が挙げられる。また、東対岸の丹生台地では丹生、小原、一木、田尾、木田、平野の各地で前期土器が採集されている。中期～後期としては、多武尾遺跡、横尾下組遺跡、東中尾遺跡、岡原遺跡、松岡遺跡、二目川遺跡などがあげられる。特に多武尾遺跡の小銅鐸、水分神社や松岡の京ヶ尾遺跡出土の銅矛は祭祀に伴うものとして注目される。

古墳時代では，地蔵原遺跡で布留式土器を伴う竪穴住居跡が検出されている。また平成12年度に調査した大規模な集落遺跡である毛井遺跡は、沖積平野の微高地上に形成されており、人々がその居住区を段丘下に求め始めたことを物語る。その他としては松岡の小牧山古墳群と真萱石棺、横尾の有田古墳群、横穴墓群としては松岡の一ノ谷横穴群、一ノ谷南横穴群、戸無瀬横穴群などが知られている。

歴史時代になると、瓦や硯が出土し整然とした掘建柱建物群である地蔵原遺跡、古代の道が発見された猪野新土井遺跡、土師器の窯跡の井ノ久保遺跡、二目川遺跡、牧ノ内遺跡、論出遺跡、九池遺跡などでは８世紀末～９世紀前半の遺物が多量に出土し、虫喰谷では豊後の国では初めての須恵器の窯跡である松岡古窯址群が発見された。また、上牧ノ内Ⅰ・Ⅱ遺跡は丘陵先端部からは8世紀後半～9世紀前半までの大量の土師器が出土し、何らかの祭祀跡と考えられている。これらの遺跡は、いずれもほぼ同時期の遺跡であることから有機的な関係があったと考えられる。

註１　鶴崎町「豊後鶴崎市」1977　歴史図書社

註２　高橋信武2002「久保田遺跡」『県道鶴崎大南線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』



番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	上松岡遺跡	2	門前遺跡	3	真萱遺跡	4	向原遺跡	5	毛井A遺跡
6	毛井B遺跡	7	久保田遺跡	8	一の谷横穴遺跡	9	一の谷南横穴遺跡	10	松岡遺跡
11	清水遺跡	12	横尾貝塚	13	有田遺跡	14	東中尾遺跡	15	岡原遺跡
16	一方平Ⅰ遺跡	17	一方平Ⅳ遺跡	18	一方平Ⅱ遺跡	19	九池遺跡	20	丸の内遺跡
21	一方平Ⅲ遺跡	22	論出遺跡	23	上牧の内Ⅰ遺跡	24	上牧の内Ⅱ遺跡	25	上牧の内Ⅲ遺跡
26	小平の辻遺跡	27	二目川遺跡	28	松岡城跡	29	京ケ尾銅矛出土地	30	小牧山古墳群
31	大内古墳群	32	新田遺跡						

第２図　上松岡遺跡と周辺の遺跡（25,000分の１）

第３章　発掘調査の成果

１，調査の経過

上松岡遺跡では、平成13年６月10日に実施した試掘調査の結果を受け、平成13年７月11日より本調査を開始した。試掘調査の結果、明確な包含層が確認できなかったので、まず遺構検出面（地表下1～1.5m）まで重機を使用し表土を除去する作業から開始し、表土の除去後、南北方向10m、東西方向8m単位にグリッドを設定し（第４図）遺構検出作業を行った。その結果、多数のピット、竪穴住居跡（？）、掘立柱建物跡、土坑などを検出したので７月18日より遺構の掘下げを行った。すべての調査は８月７日に終了した。

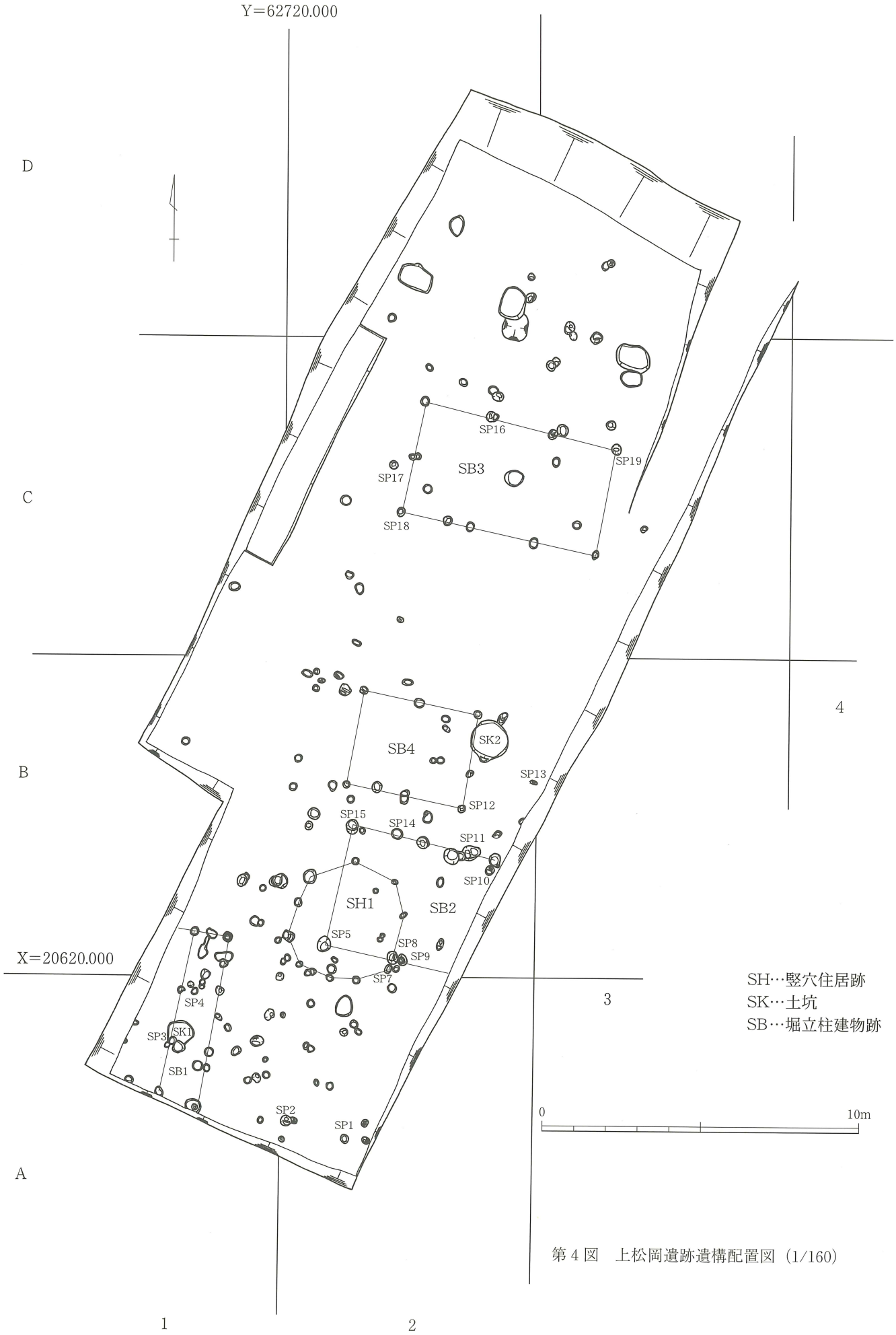
第３図　上松岡遺跡周辺の地形（2,500分の１）

２，調査の概要

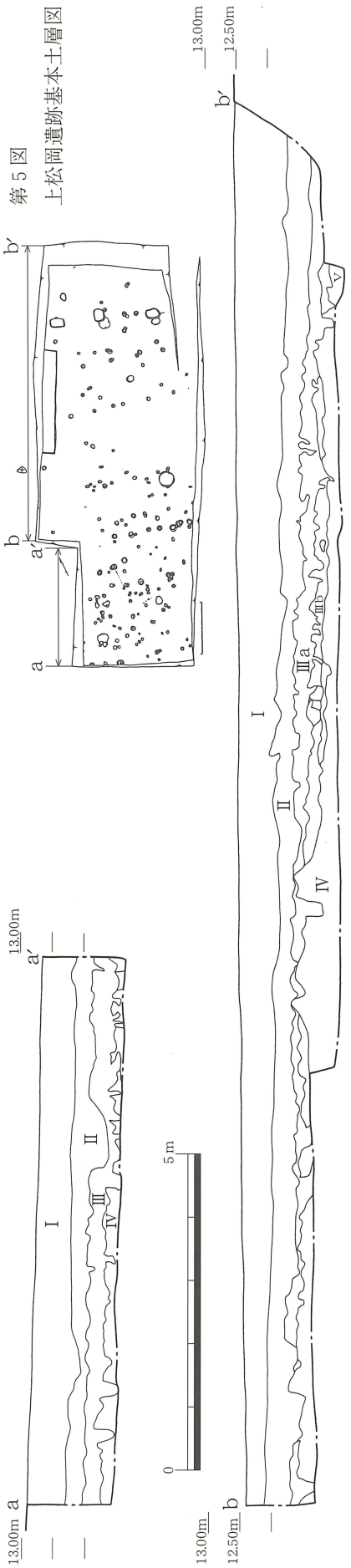
調査面積　約300㎡

遺構…２間×２間、２間×３間の掘立柱建物跡各１棟、その他、規模は不明であるが庇付きを含め２棟の掘立柱建物跡２棟、円形の竪穴住居跡１基、弥生時代中期頃の袋状土坑を含む土坑２基およびピットを多数検出した。

遺物…旧石器時代の剥片、弥生時代の下城式甕や土器片、ピットから１４世紀ごろの土師皿などを検出した。



第４図　上松岡遺跡遺構配置図（1/160）



第５図　上松岡遺跡基本土層図

３，基本土層（第５図）

調査区の西壁を図示して、上松岡遺跡の層序を説明する。第Ⅰ層から第Ⅴ層まで大別できる。

第Ⅰ層（撹乱層）　造成する際の埋土である。

第Ⅱ層（褐色土）　旧表土であるが、果樹園造成の際に客土した土である。均質で粘質ではないがしまりがある。
若干の小礫や遺物を含むが、この遺物はこの遺跡に伴う遺物ではなく客土した際混入したものである。

第Ⅲ層（黒褐色土）　大野川流域に見られるいわゆるクロボクと称される土壌である。この層の上下面ともにかなり起伏が激しいが、これは下面については木の根の撹乱によるものであり、上面は果樹園造成の際の整地作業で生じたものであろう。断面には遺構が観察でき、遺物もこの層から出土する。

第Ⅳ層（アカホヤ層）２層に分けることができる。Ⅳ－ａ層は黄褐色、Ⅳ－ｂ層は暗黄褐色でいずれも小礫が混じる。ブロック状のアカホヤも観察できるが、下の方がやや黒ずむなど純粋なアカホヤ層というよりもアカホヤ風化層と判断したほうがよいと考える。遺物は出土していない。

第Ⅴ層（淡黄褐色土）粘質はなくかなり硬質な層である。アカホヤ降下以前の層であり、本遺跡の基盤層である。

第Ⅵ層（礫層）　かなりの起伏がみられる。

４，遺構と遺物

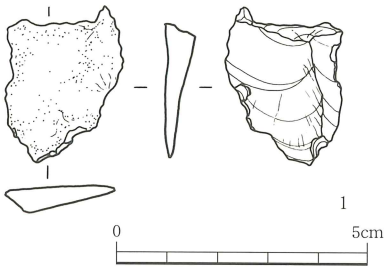
上松岡遺跡では旧石器時代の遺物、弥生時代及び中世の遺構・遺物を検出した。第4図は遺構配置図であるが、調査区中央でより南側には掘立柱建物跡3棟、竪穴住居跡１棟、不定形土坑および袋状土坑各1基、北側では掘立柱建物１棟を検出した。中央から北にかけて遺構密度が低くなるが、これはこの遺跡が丘陵の縁辺部にあたるからであろう。以下遺構・遺物について時代ごとに説明を加えていくが、遺物については小破片が多いため比較的図化できるものを掲載し、基本的に遺構ごとに、包含層から出土した遺物は一括して説明を加える。

(1) 旧石器時代の遺物

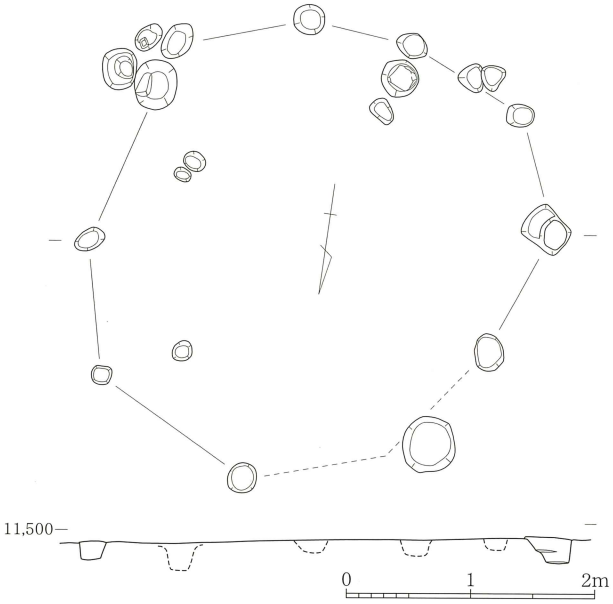
この時期の遺跡はアカホヤ下層の淡黄褐色土層の下面より遺物が１点が出土しただけで、遺構は検出しなかった。

①旧石器時代の遺物（第６図）

Ａ－２区でトレンチ調査をした際に検出した。長さ3.1㎝、幅2.35㎝、厚さ0.60㎝、重さは3.50g を測る。石材は流紋岩である。自然面が残っていることから、原石に近いものから縦長剥片を剥いだものであろう。その後、打面が残る側の上側部分が折れたもので、そのため、剥離面の左上にはその痕跡が残る。



第６図　旧石器時代の遺物



第７図　ＳＨ１実測図

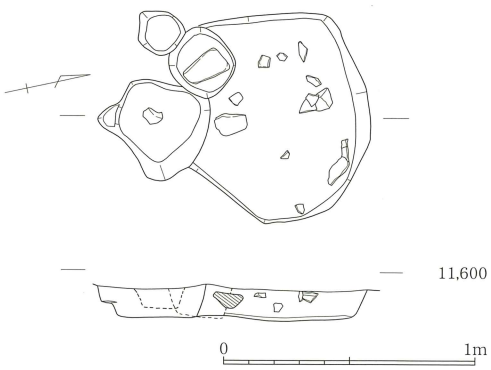
（２）弥生時代の遺構と遺物

この時期の遺構としては、住居址１棟、土坑２基を検出した。また、遺物は各土坑やピットから出土している。

①竪穴住居跡

ＳＨ１（第７図）

調査区の南東部、B2 区で検出。壁や床面など竪穴部分はすでに削平されている。柱穴の配列から円形竪穴建物と復元される。柱穴の深さはほぼそろっており、P8 と P9 の中心を通り、P4 を結んだ線がこの住居の長軸であり、P8、P9 の間が入り口の可能性が高い。柱穴間の径の平均が４ｍ前後であることから、本来の床面積は30㎡前後の中型の竪穴住居と推定される。この住居址から遺物は出土していないが、大野川流域の例から見ても弥生時代のものと考えて問題はないであろう。



第８図　ＳＫ１実測図

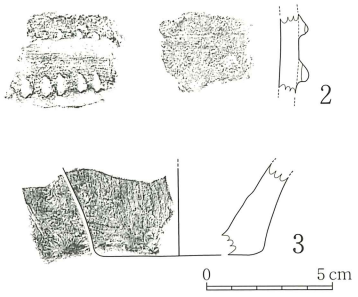
②土坑

ＳＫ１（第８図）

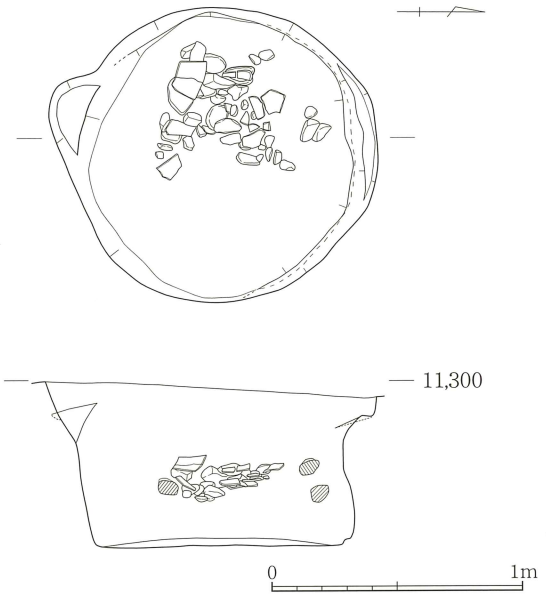
A1 区で検出した上面が楕円形の土坑である。南側は、いくつかのピットと重複しているが、遺構上面の観察や土層断面により他のピットがこの土坑に掘り込まれていることがわかった。床面は平坦であり、立ち上がりはやや急である。埋土は黒褐色土であるが黄褐色土のブロックが混じっていることから人為的に埋め戻したものであろう。上面の規模は南北80㎝で東西95㎝・深さ12㎝を測るが、上部はかなり削平されており、本来の形状や規模については不明である。

出土遺物（第９図）

ＳＫ１からは遺物が出土しているが、小片が多いためここでは図示できるものについて説明を加える。２は二条刻目突帯を巡らせる甕の口縁部付近か。突帯はやや下がり気味であるが断面は三角形を呈しており、二条の刻み目を同時にヘラ状工具により施文している。内面はナデ調整である。色調は黄褐色を呈しており、長石、角閃石、石英を含む。３は壺の底部か。平底で、復元口径は6.8㎝、外面はハケ目調整後、ヘラ磨きが施されている。内面はローリングしており調整は不明であるが、底面はヘラ状工具を使用して丁寧に仕上げられている。



第９図　ＳＫ１出土遺物実測図



第10図　ＳＫ２実測図

ＳＫ２（第10図）

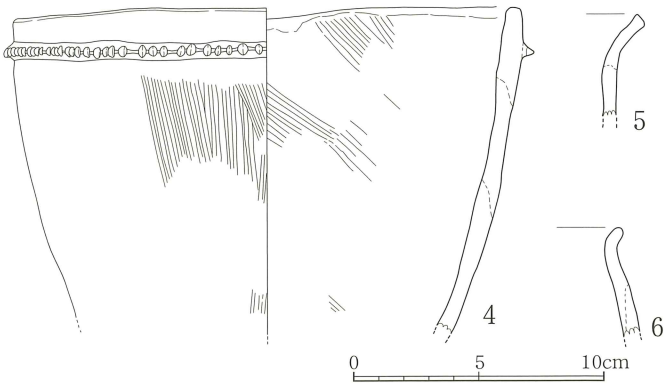
Ｂ２区で検出した円形の底部がややオーバーハングする袋状土坑で、底面はおおむね平坦である。規模は径が120㎝でほぼ正円に近く、検出面からの深さは65㎝を測る。調査の都合上、土層については写真で説明する。

埋土はいずれもこの土坑の使用停止後の堆積層である。その埋没状態の特徴は、下位に遺物の一括廃棄が認められることである。まず、下位に茶褐色土の層が堆積し、次に土器を多量に含んだ黒褐色土層、その上に北側から投棄されたかのように黄褐色の大型のブロックを含む層、そして礫を多量に含んだ黒褐色の層が存在する。多量の礫や、大型の黄褐色ブロックが含まれていることから人為的に埋められたものであろう。

ＳＫ２土層

出土遺物（第11図）

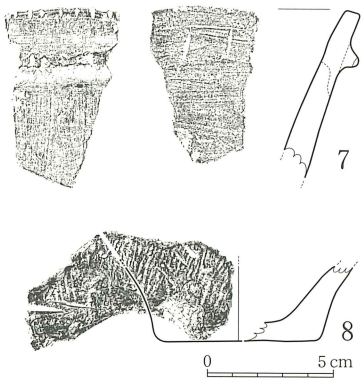
４は一条刻目突帯を口縁下位に巡らす甕である。土坑下位に一括廃棄されていた。胴部中位の輪積みのラインで破損しており、底部は検出しなかった。口縁は胴部よりまっすぐに立ち上がり、端部は平坦に仕上げられるが、稜ははっきりせず刻目も施されていない。胴部は内・外面ともハケ目調整後、ナデ仕上げである。いわゆる「下城式」甕である。５は甕、６は壺の口縁部か。小片のため法量は不明であるが、５は如意形の口縁部で、端部は面取りして平坦に仕上げられており、口唇部には刻み目は施されていない。内・外面共にナデ仕上げ、明褐色を呈しており、長石、角閃石、石英を含む。６の口縁は端部付近で外反し、端部は面取りされておらず丸く、内・外面共にナデ仕上げで、明黄褐色を呈し、長石、角閃石を含む。



第11図　ＳＫ２出土遺物実測図

③その他の遺物（第12図）

この時代の遺物は土坑以外にも柱穴や包含層から出土しているが、土坑と同様に細片が多く、図示できるものだけを掲載する。7はA－2区のSP11の包含層から、8はSK1に重複するSP3より出土。7は一条刻目を口縁下位に巡らす甕である。口縁はまっすぐに立ち上がり、端部は平坦に仕上げられ、ヘラ状工具により突帯と口唇部に同時に連続して刻み目を施す。内面はハケ目調整後強いナデ、外面はハケ目調整である。いわゆる「下城式」甕で、明黄褐色を呈し、長石、角閃石、石英を含む。8は甕の底部である。復元底径は6.6㎝。内面はナデ仕上げ、外面はハケ目調整である。底面はヘラ状工具により丁寧に仕上げられている。



第12図　その他の遺物

（3）中世の遺構と遺物

弥生時代の竪穴住居の主柱穴以外にも調査区南側を中心に数多くの柱穴を検出したが、弥生時代の遺物を除くと中世の遺物しか検出できなかったので、これらの遺構は中世のものと判断した。また、土坑や柱穴以外の遺構は検出できなかった。これらの柱穴を基に4棟の掘立柱建物跡を復元することができたが、復元できなかった柱穴のなかには楚盤の入ったものもあり、また検出した数を考慮すると実際はもっと多く建っていたはずであるが、遺構面がかなり削平されていることから消滅したものも少なくないと考える。

①掘立柱建物跡

SB1（第13図）

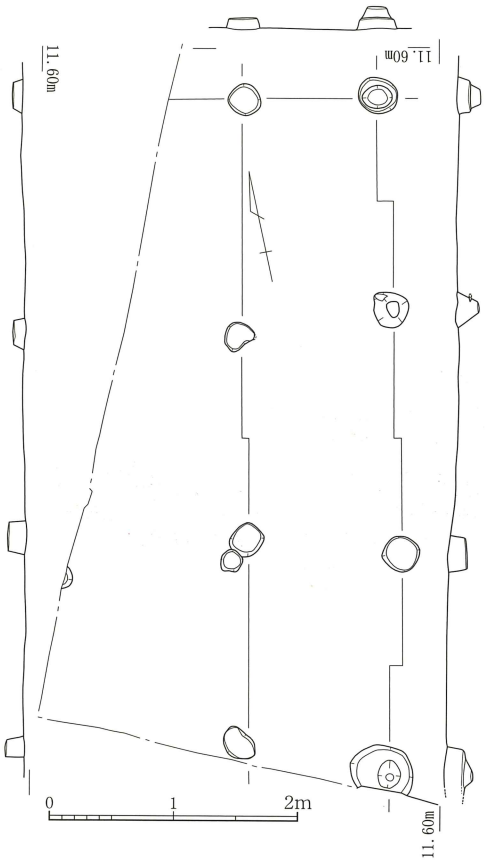
調査区南部端A1区で検出した庇がついた建物跡である。建物跡が調査区外に延びているために全体の規模は不明である。桁行方位はN－79°－Wを指す。桁行間平均は170㎝。

1号掘立柱建物跡計測表

建物　桁行間：P1－160㎝－P2・P2－160㎝－P3・P3－190㎝－P4

庇　桁行間：P5－170㎝－P5・P6－195㎝－P7・P7－180㎝－P8

梁行間：P4－110㎝－P15



第13図　SB1実測図

ＳＢ２（第14図）

調査区南Ｂ２区で検出した建物跡である。建物跡が調査区外に延びているために全体の規模は不明である。桁行方位はＮ－75°－Ｗを指す。桁行平均は227㎝。

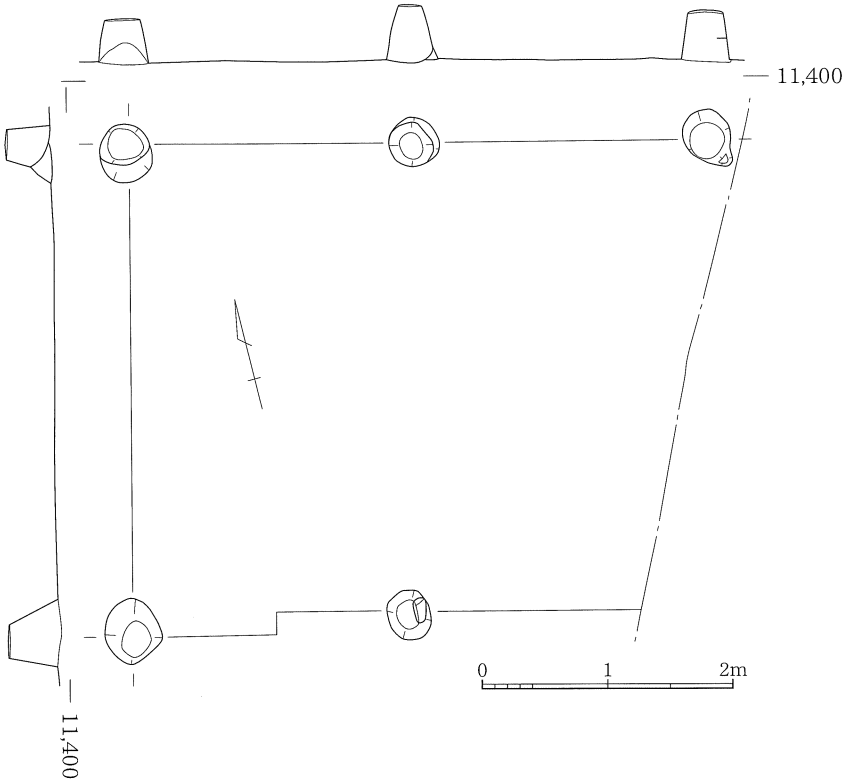
２号掘立柱建物跡計測表

建物　桁行間：Ｐ２－226㎝－Ｐ３・Ｐ３－235㎝－Ｐ４・Ｐ５－220㎝－Ｐ１

梁行間：Ｐ１－390㎝－Ｐ２

ＳＢ３（第15図）

調査区ほぼ中央Ｃ２区で検出した２間×４間の建物跡である。全体的な規模は 3.7ｍ×３ｍである。桁行方位はＮ－78°－Ｗを指す。梁行平均152㎝、桁行平均186㎝。

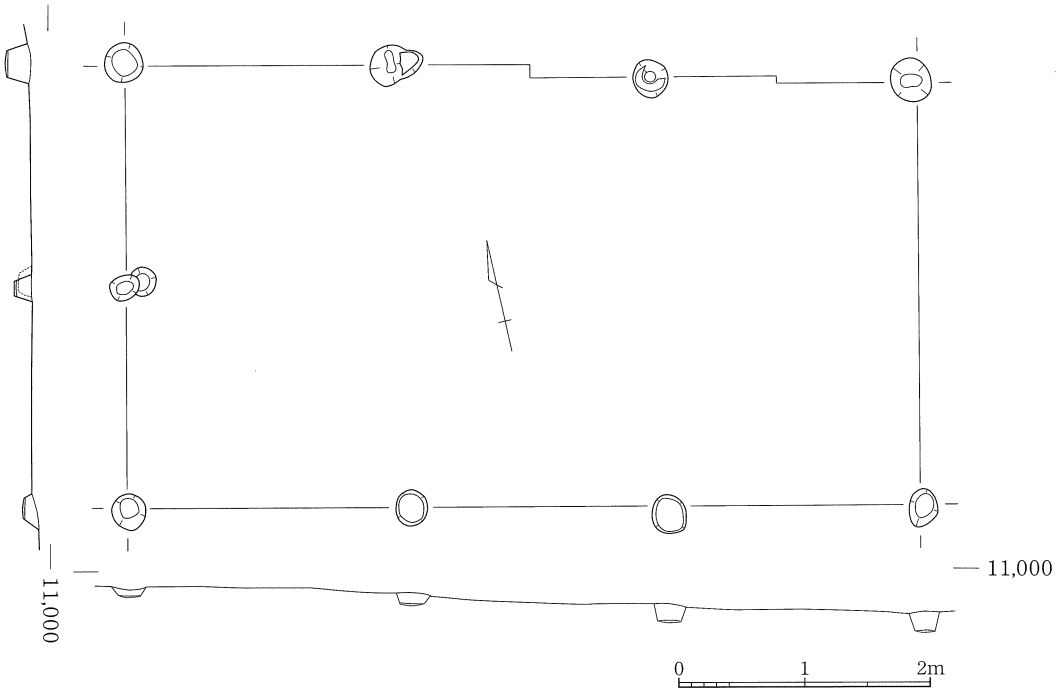


第14図　ＳＢ２実測図

３号掘立柱建物跡計測表

建物　桁行間：Ｐ２－180㎝－Ｐ３・Ｐ３－190㎝－Ｐ４・Ｐ６－186㎝－Ｐ７・Ｐ７－190㎝－Ｐ１

梁行間：Ｐ１－300㎝－Ｐ２・Ｐ４—190㎝—Ｐ５・Ｐ５－114㎝－Ｐ６



第15図　ＳＢ３実測図

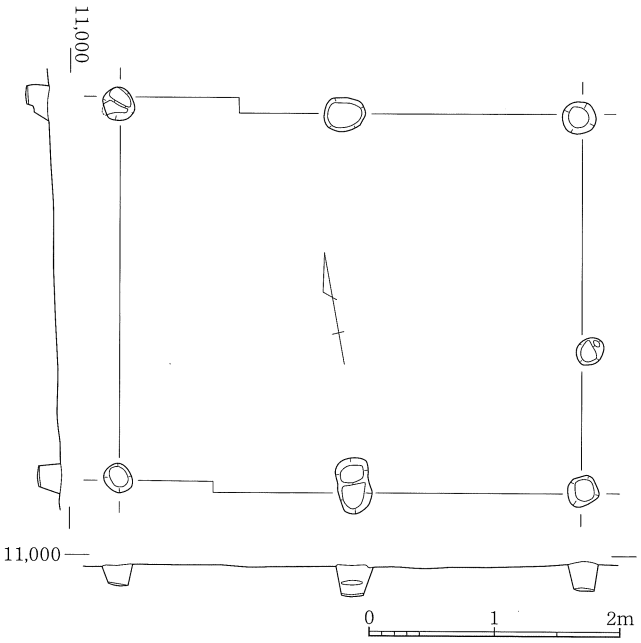
ＳＢ４（第16図）

調査区中央北側Ａ２ 区で検出した２間×３間の建物跡である。全体的な規模は6.２ｍ×3.35ｍである。桁行方位はＮ－79°－Ｗを指す。梁行平均172㎝、桁行平均211㎝。

４号掘立柱建物跡計測表

建物　桁行間：Ｐ３－210㎝－Ｐ４・Ｐ４－210㎝－Ｐ５・Ｐ５－210㎝－Ｐ６・Ｐ７－200ｍ－Ｐ８・Ｐ８－210㎝－Ｐ９・Ｐ９－225㎝－Ｐ１

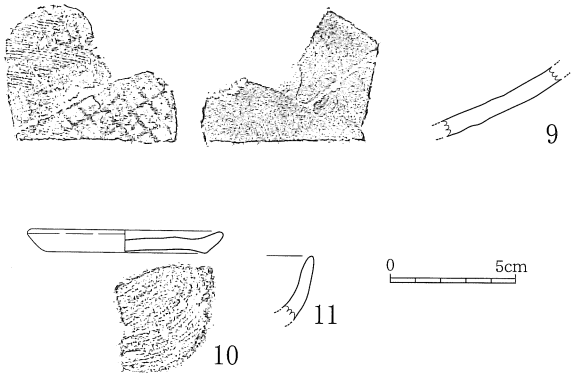
梁行間：Ｐ１－175㎝－Ｐ２・Ｐ２－180㎝－Ｐ３・Ｐ６－334㎝－Ｐ７



第16図　ＳＢ４実測図

中世の遺物（第17図）

９は調査区南側Ａ２区の包含層より出土した土鍋の底部片である。内・外面はナデ仕上げであるが、外面には格子目状のタタキ痕が残る。褐灰色を呈し長石・角閃石を含む。10は調査区中央ＳＰ14より出土。回転糸切り離しの小皿である。復元口径7.8㎝、復元底径6.6㎝、器高は0.8㎝を測る。淡黄色を呈しており、長石、角閃石、石英を含む。11は椀の口縁部か。淡黄色で長石、角閃石、石英を含む。器形から13世紀ごろのものであろう。



第17図　包含層出土遺物

作業風景

第４章　まとめ

上松岡遺跡の調査では、主として弥生時代と中世に位置付けられる遺構・遺物を確認した。この他に、１点ではあるが旧石器時代の剥片も確認している。

弥生時代のものとしては、弥生時代中期に位置付けられる円形竪穴住居1基および土坑2基である。いずれも後世の開発に伴いかなりの削平を受けており、竪穴住居については、わずかに円形に並ぶ柱穴の跡のみ確認できたにすぎない。土坑についても同様で、ＳＫ２は比較的残りがよく堀り方や底部の様相が確認できたが、ＳＫ１はわずかに床面が残存していただけである。今回検出した柱穴のなかには、不完全ながら円形に並びそうな柱穴跡もあり、実際にはまだ竪穴住居は存在した可能性もあるが、遺構面がかなり削平されており消滅した遺構も少なくないであろう。

中世の遺構としては、４棟の掘立柱建物跡を確認した。全体的な規模を確認できたのは２棟のみであるが、中には庇を持つ大型の建物も存在する。出土した遺物が少なく、具体的な時期を比定することは難しいがピットから出土した糸切り底の小皿からみて13世紀頃であろう。これらの建物はいずれも東から北に約14度振れており、ほぼ同じ時期と考える。

ところで、本調査区は大野川の左岸に位置するが、ここは鶴崎台地の東端いわゆる松岡面が開析されて形成された谷状地形の尾根の先端部にあたる。現在では後世の開発や圃場整備等で旧地形を残している場所は少ないが、本来は鶴崎台地から伸びる小丘陵がヤツデ状に沖積平野に向かって伸びており、こういった小丘陵上に弥生時代の遺跡が展開していたのであろう。その背景としては、大野川の氾濫を避け丘陵上に生活の場を求めたこと、初期水田がこういった谷状地形に挟まれた低湿地部分で経営されていたこと（註３）などがあげられる。しかし、これらの初期水田については容易に造成が行われる反面、自然条件に制約されることが多く、きわめて不安定な水田経営であり、それを支えていた集落もまだまだ未成熟であったことが想像できる。古墳時代になると上松岡遺跡の北東に位置するする毛井遺跡Ｂ地区のように大規模な集落（註４）が沖積平野の微高地上に展開するようになるが、これは、自然条件をある程度克服する技術が導入され、集落を支える稲作経営もかなり安定し始め集落としてかなり成熟してきたことを意味する。しかしながら、それ以後の明確な集落が近世にいたるまで微高地上に形成されないのは、まさに大野川による度重なる水害に起因するものであり、堤防が整備される戦前まではしばしば発生した大規模な洪水がこの地域の生活を左右していたからであろう。

今回の調査では、弥生時代及び中世の遺構を確認したが、本来の遺構面は削平されており、また調査区も狭く、遺跡の詳細な性格を明らかにすることはできなかった。上松岡遺跡に展開していたであろう集落の全貌を明らかにするには、今回の成果を踏まえ、周辺の調査を積み重ねていくことが肝要であろう。今後の調査に期待する。

註３　後藤一重　2001「毛井遺跡Ａ地区」『国道197号南バイパス道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』

註４　綿貫俊一・五十川雄也2002「毛井遺跡Ｂ地区」『国道197号バイパス工事に伴う発掘調査報告書』

写　真　図　版

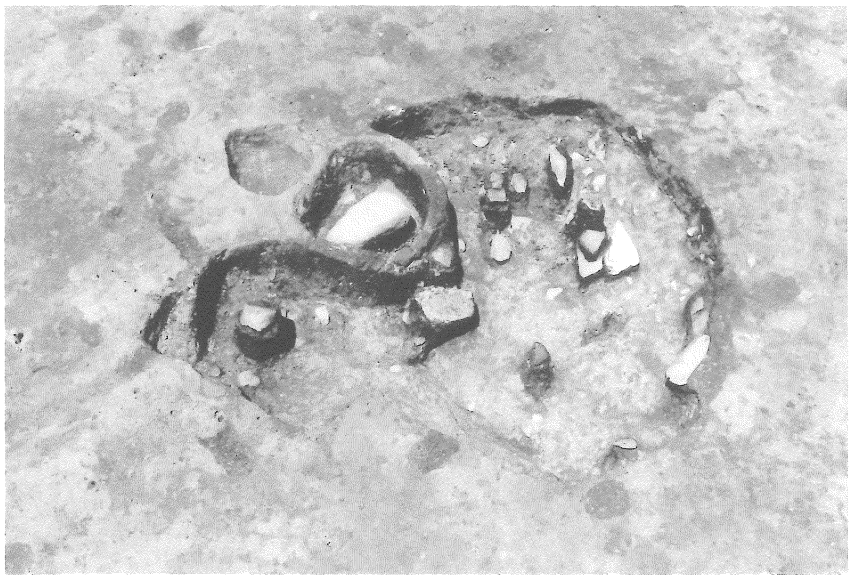
1，上松岡遺跡遠景
（南から）

2，上松岡遺跡全景

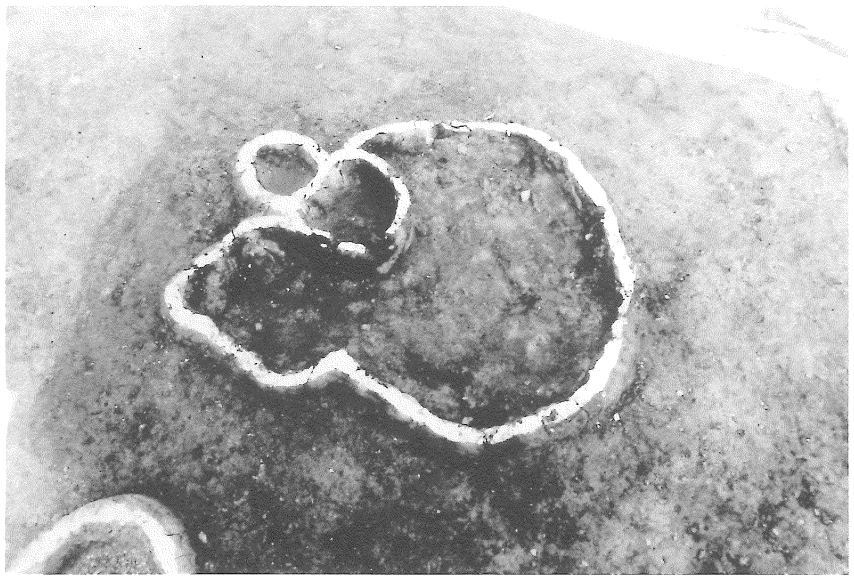
3，北側土坑群
（ＳＢ３）

4，南側土坑群
（ＳＢ２・ＳＢ４）

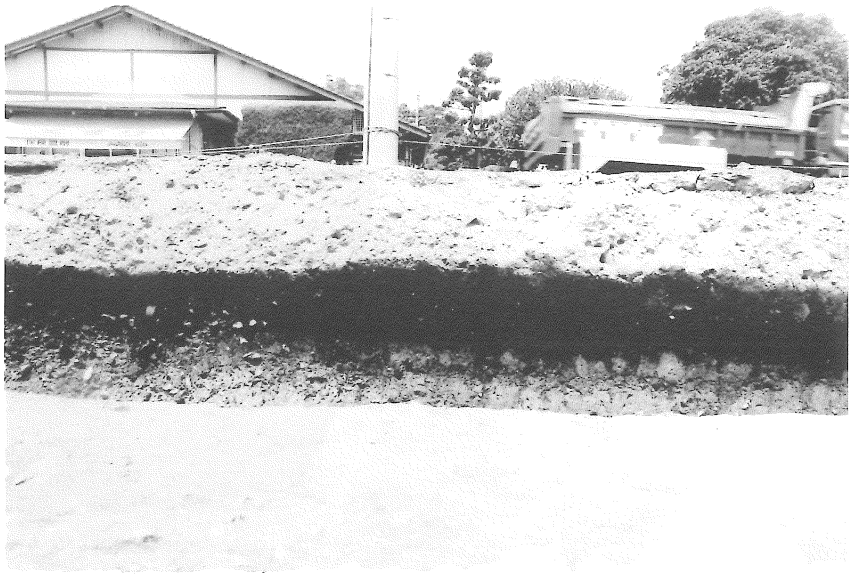
5，ＳＫ１遺物出土状況



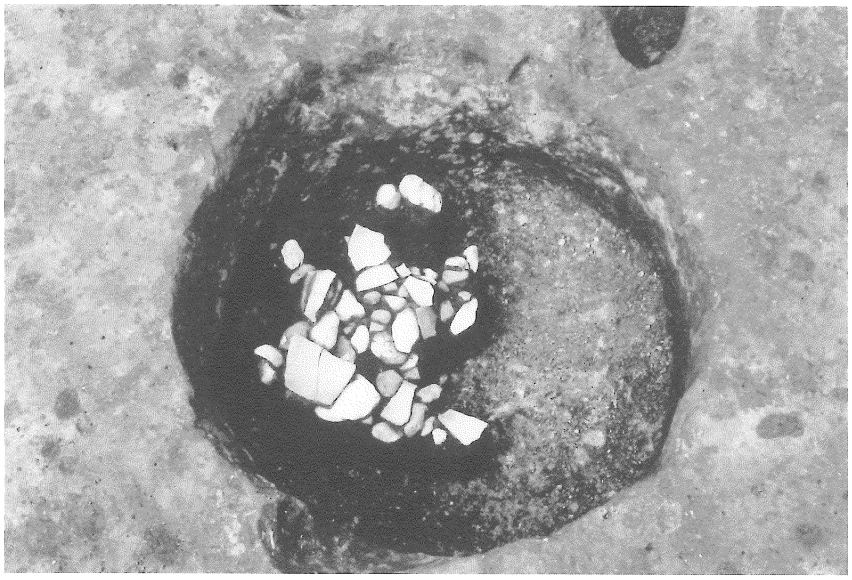
6，ＳＫ１完掘状況



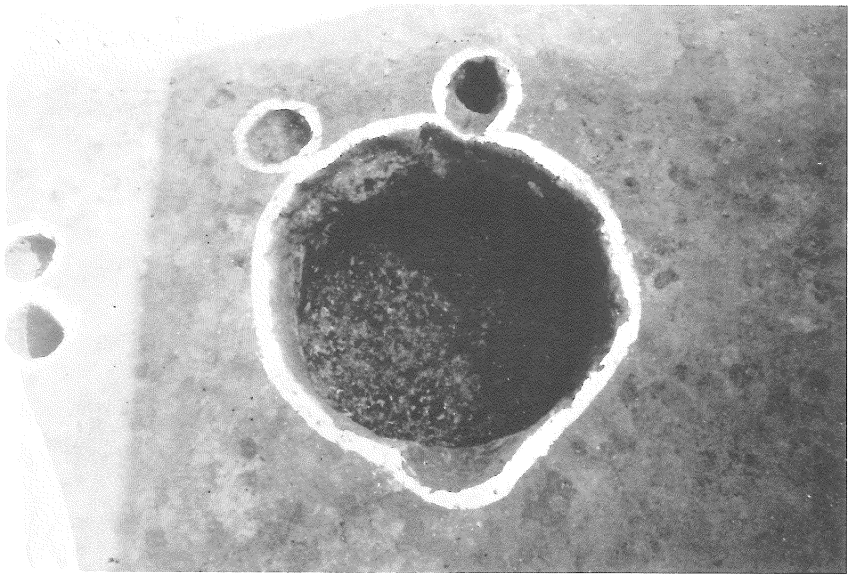
7，基本土層（Ｃ－１区西壁）



8，ＳＫ２遺物出土状況



9，ＳＫ２完掘状況



10，ＳＫ２出土遺物（下城甕）

報　告　書　抄　録

フリガナ	カミマツオカイセキ
書名	上松岡遺跡
副書名	街路鶴崎駅前松岡線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	大分県文化財調査報告
シリーズ番号	第 152 輯
編著者	甲斐　寿義
編集機関	大分県教育委員会
所在地	〒870－0021　大分県大分市府内町３－10－１
発行年月日	2003年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かみまつおかいせき 上松岡遺跡	おおいたしおおあざけい 大分市大字毛井	322	177	33° 11′ 01″	131° 40′ 22″	20010711 ～ 20010811	300	道路改良 工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上松岡遺跡	包含層 集落跡	弥生 中世	遺物包含層 土坑２ 竪穴住居跡　1 掘立柱建物跡　4 柱穴　多数	弥生土器（甕） 小皿（中世）	

上　松　岡　遺　跡

－街路鶴崎駅前松岡線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

大分県文化財調査報告書　第　１５２　輯

編　集　　大分県教育委員会文化課（文化財資料室）
〒８７０－１１１３
大分市大字中判田字ビワノ門１９７７番地
ＴＥＬ（０９７）５９７－５６７５

発　行　　大分県教育委員会
〒８７０－００２１
大分市府内町３丁目１０番１号
ＴＥＬ（０９７）５３６－１１１１

印　刷　　有限会社 元屋印刷